

河野航：ピアノ

KONO Wataru : Piano

5歳よりピアノを始めた(らしい)。飽きっぽい性格が災いし、引越しや進学のためにピアノの勉強が中断され、おまけに中学校では吹奏楽部でチューバ、大学ではオーケストラに入ってヴィオラに浮気をする始末。ただし、チューバやヴィオラを勉強したおかげで、ピアノを弾くのにあたっても左手や中声を聴けるようになったという点もあるので、悪かったことばかりではないと都合よく解釈している。新交響楽団にヴィオラで入団した直後の演奏会で、伊福部先生の『シンフォニア・タブカーラ』に出会い、氏の作品に魅せられる。現在はオーケストラ・ニッポニカに所属し、通常はヴィオラ、必要に応じ鍵盤楽器などを担当することもある。ピアノを鈴木和代、坪井圭子、近藤信子、柴沼尚子、故大島正泰、福本俊之、三輪郁の各氏に師事。

●
由谷一幾：ティンパニ

YUTANI Kazuki : Timpani

小学生時代に『ドラゴン・クエスト』や『春の祭典』と出会ってクラシックの魅力に取り憑かれ、作曲の独学を始める。中学、高校の吹奏楽部で打楽器とトロンボーンを経験した後、早稲田大学交響楽団(ワセオケ)へ入団、打楽器に専念する。大学4年時のヨーロッパ公演では初演の地シャンゼリゼ劇場で念願の『春の祭典』のティンパニを叩いた。大学卒業後の2009年にもOBとしてヨーロッパ公演へ同行して石井眞木先生の『モノ・プリズム』の和太鼓を叩き、更に自作の『和太鼓と管弦楽のための協奏曲』が演奏されるため2012年のヨーロッパ公演にも同行した。この作品が収録されたBlu-ray Disc『Live in Berlin』がUniversal社から発売されている。オーケストラ・ニッポニカの活動に参加するようになったのもそもそもワセオケの先輩の紹介だったのだが、入団した後にニッポニカと石井眞木先生の関係の事を知り、上記の様な経歴を持つ者として不思議な御縁を感じている。作曲を故今井重幸氏に、打楽器を久保昌一氏に師事。

●
加藤のぞみ：ヴァイオリン

KATO Nozomi : Violin

3歳より『言葉を覚えるように』ヴァイオリンを『身につける』。初めての邦人作品との出会いは、10歳のときの宮城道雄『春の海』。尺八の様な音を出すのだから、音の最初からヴィブラートをかけない、と教えられ、ノンヴィブラートの美しさを知る。新交響楽団に入団して『伊福部個展』で、ブラームスやマーラーとは全く違う交響楽の世界が在る事に衝撃を受ける。オーケストラ・ニッポニカで活動する中で、日本人作曲家にも多くの魅力的な室内楽曲があることを知り、紹介したいとこの企画に取り組む。ヴァイオリンを故広瀬八朗、藤家桜子の各氏に、バロック・ヴァイオリンを竹嶋祐子氏に、室内楽を原田幸一郎氏に師事。

100年前、
北の地に
伊福部昭が
生れた探楽愉快
Vol.4

2014年2月10日(月)

19:15 開演 18:30 開場

大田区民ホール・アプリコトホール

伊福部昭：ヴァイオリンとピアノのための二つの性格舞曲 (1955/61)

IFUKUBE Akira : Deux Caractères pour Violon et Piano

第1 性格舞曲	アレグロ・バッラビレ	Caractère I - Allegro ballabile
間奏曲	ラブソディコ	Intermède - Rapsodico
第2 性格舞曲	アレグロ・リトミコ	Caractère II - Allegro ritmico

早坂文雄：「室内のためのピアノ小品集」(1941)より

HAYASAKA Fumiwo : from “Piano Pieces for Chamber”

第1 曲	グラーヴェ	No.1 Grave
第2 曲	アレグレット・バッラビレ	No.2 Allegretto ballabile
第10曲	モデラート・テネレッツァ・アフエット	No.10 Moderato tenerezza affetto
第6 曲	アレグレット・ユモリスティコ	No.6 Allegretto umoristico

早坂文雄：写真《ポートレート》(1940)

HAYASAKA Fumiwo : Portrait

A. N. チェレプニン：ティンパニとピアノのためのソナチネ Op.58 (1939)

Alexander Nikolayevich TCHEREPNIN : Sonatina for Timpani and Piano

第1 楽章	アレグロ・マエストーソ	I. Allegro maestoso
第2 楽章	アニマート	II. Animato
第3 楽章	アンダンテ・レジオーソ	III. Andante religioso
第4 楽章	アレグロ・マルシア	IV. Allegro Marcia

— 休 憩 Intermission —

サティ：右と左に見えるもの ～ 眼鏡なしで (1914-15)

Eric SATIE : Choses vues à droite et à gauche (sans lunettes)

I. 偽善者のコラール	I. Choral hypocrite
II. 手探りのファーガ	II. Fugue à tâtons
III. 筋肉質な幻想曲	III. Fantaisie musculaire

伊福部昭：ピアノ組曲 (1933)

IFUKUBE Akira : Piano Suite

盆 踊	BON-ODORI, Nocturnal dance of the Bon-Festival
七 夕	TANABATA, Fête of Vega
演 伶	NAGASHI, Profane minstrel
佞武多	NEBUTA, Festal ballad

伊福部昭：ヴァイオリン・ソナタ (1985)

IFUKUBE Akira : Sonata for Violin and Piano

第1 楽章	アレグロ	I. Allegro
第2 楽章	《カンティレーナ》アンダンテ	II. 《CANTILENA》Andante
第3 楽章	アレグロ・ヴィヴァーチェ	III. Allegro vivace

伊福部昭と早坂文雄**チェレプニン来日の頃**

林 淑 姫

伊福部先生に最後にお目にかかったのは2000年10月のことであった。旧日本近代音楽館が毎年制作していた作曲家展のその年のテーマが早坂文雄で、夏の盛りの頃、展示資料拝借の願いを兼ねてお話しを伺いたいと申し入れていたのだったが、秋に入ってアイ夫人の重篤な病状を伝えてくださる方があり、訪問をご遠慮することにした。その旨手紙を書き送ったのだったが、間もなく先生から「とにかく来なさい」というお電話をいただいた。「早坂君のことでしょう。遠慮することはありません。」

短い時間だったが、率直に、まっすぐに、半世紀以上前のことを昨日のこのようにお話しくださる先生のご様子には、早くに歿くなった友のために出来ることは何でも、という真率な想いが溢れていて、そのとき改めて伊福部昭と早坂文雄の友情の重さを知った。同時に、残されたものが一方的に背負う悲しみと辛さも思った。志なかばにして斃れた故人の無念をもっともよく知る友人が抱き続ける哀惜の想い。伊福部昭が向こうの世界に入っていったとき、迎えた早坂文雄はどんなことばをかけたことだろう。

伊福部昭と早坂文雄。二人に共通するものは北海道出身というだけで、作風も音楽観も対極にあるといつてよいほど異なる。伊福部昭のこだわりは北海道釧路の原野とアイヌにある。早坂文雄はもともと内地（仙台）生れということもあろうか、北海道へのこだわりはむしろなく、大和朝廷以降の日本の古代に向けられた眼差し―戦時中は「日本的なるもの」と呼ばれた―が彼の中期の作品を蔽っている。

伊福部昭は迷わないひとだったが、早坂文雄は迷うタイプだったと思う。音楽に対する考え方もそうだが、作品を書いている最中も幾度も幾度も書き直してなかなか決められない。彼の文庫には反古にされたスケッチがそれぞれ山のようにある。残されたスケッチを時系列に並べてゆくと（できる場合に限り）、不意に初めの頃に戻っていることを発見することがある。迷う早坂に、伊福部昭はどのようにアドバイスしたのか。早坂の札幌時代の「作曲ノート」中、昭和14（1939）年1月4日付の頁に「私の作曲に就いて伊福部氏と語りあったこと」という一文がある。箇条書き①から⑩のうちに、「管絃楽法の確立」などと並んで「何を表現するか、又それを如何に表現するか」「甘い、古い和声にデリケート過ぎる、はっきりしてゐない」「構成美がない」などと書かれている。伊福部昭との議論が早坂に与えたものは大きかった。二人は同じ大正3（1914）年生れだが、関係としては3ヶ月早く生れた伊福部の方がやはり兄で、早坂が弟という雰囲気がある。交友の最初に何となく決まった位置関係はその後も変わらないものだ。

今夜演奏される作品には、スペインのピアニストG.コーブランドに依頼され作曲した伊福部昭の処女作「ピアノ組曲」（1933）および戦後のヴァイオリン作品と、早坂文雄の日本的技法による作品「室内のためのピアノ小品集」（1941）に並んで、チェレプニンの「ティンパニとピアノのためのソナチネ」（1939）がある。昭和9（1934）年に来日したA.N.チェレプニンはその後も度々訪れ、11年に伊福部昭が横浜のグランドホテルに同宿してレッスンを受けたことは有名な話だから、それについてつけ加えることは何も無いが、チェレプニンから伊福部昭が何を学んだかといえば、「伝統を意識した思考によってのみ、はじめて国際的な訴えをもつ作品が生れる」（伊福部昭『音楽入門』）ということ一点である。新たな示唆ではなく彼自身の持論に強力なバックボーンを得たといつてよいと思う。独学者伊福部の生涯唯一の師チェレプニンの作品についての彼の評を私たちは聞いていないし、チェレプニンの音楽が彼の作品に登場することも無い。

最後になったが、サティ「右と左に見えるもの（眼鏡なしで）」（1914-15）は、昭和9年9月、伊福部兄弟と早坂が札幌で「国際現代音楽祭」（新音楽聯盟）というやけに大きなタイトルで音楽会を開いたときに採り上げた作品である。伊福部昭のヴァイオリン、早坂のピアノで演奏された。国内初演である。当時の楽譜を「早坂文雄展」のために拝借したが、それは「3ヶ月前にパリから到着したばかりでした。」と伊福部先生が懐かしそうに仰っていたことを今、思い出している。

伊福部昭：ヴァイオリンとピアノのための二つの性格舞曲

この曲は、作品名が知られながら譜面の所在が明らかでなかったもので、遺品を整理していたご遺族が譜面を見つけられたという。1956年に委嘱者のアムステルダム・デュオにより初演されたとの記録がある。いくつかのデッサン等と共に発見された譜面は、作曲者の手により1961年に改訂されたもので、更に曲の一部が、「郎曲 鬢多々良（1973）」に流用されたという書き込みもある。

第一性格舞曲、間奏曲、第二性格舞曲の3曲からなり、第一性格舞曲はAllegro ballabile、間奏曲はRapsodico、第二性格舞曲ではAllegro ritmicoの指定。第二性格舞曲では、作曲者が考案したヴァイオリンの特殊奏法の指示がある。伊福部は独学で作曲を学んだだけでなく、ヴァイオリンが得意だったようで、北海道帝国大学農学部在学中に演奏活動を始めている。北大の文武会管絃楽部のコンサートマスターとなり、絃楽四重奏団を結成し、サティの項で紹介するような活動をするのであるから、相当な腕前だったに違いない。しかしながら、この特殊奏法は、のちの作品に使われることは無かった。

この曲の沢山のエッセンスはヴァイオリン・ソナタにも含まれている事が、後程おわかり頂けると思う。ヴァイオリン・ソナタについて「ヴァイオリンとピアノのためのソナタというかなり窮屈な制約のもとで、自己の語法や、伝統的な感性が、これに、どのように対応し得るものであるかが一番の問題であった」との作曲者としてのコメントも伝えられている。それはソナタに取り組むはるか前に、ヴァイオリンとピアノのデュオという委嘱に依えて、荒削りでありながら積極的に様々な効果を試行したこの作品を経てのコメントだったのだ、と納得できる。(N)

今回の演奏に際しましては、ご遺族から譜面の提供を頂きましたことを感謝申し上げます。

- 楽器編成：ヴァイオリン+ピアノ、演奏所要時間：約5分
- 使用楽譜：自筆譜（ご遺族所蔵）

早坂文雄：「室内のためのピアノ小品集」より

「七人の侍」「羅生門」などをはじめとする多くの映画音楽を作曲したことで知られる早坂文雄は、伊福部昭と同様、映画音楽のみならず、交響作品や器楽作品にも意欲的に取り組みを続けた作曲家である。戦前に北海道で結成された「新音楽聯盟」では、伊福部昭らとともに演奏活動を行い、ピアノを担当していた。早坂文雄は1955年に41歳で早世するが、その後の日本の音楽界に強い影響を残した。

「室内のためのピアノ小品集」は、1941年に書かれたピアノ独奏のための小品集で、17曲から成る。「室内のための」とは、作者の作曲ノートの言葉を借りれば、『室内で誰に聴かせるのではなく弾いて自らが楽しむといつたもの』とのことで、17曲それぞれに特別な関連性はなく、個々が独立した性格を持った曲集である。本日は、ここから4曲を選んで演奏する。

第1曲 グラーヴェ：荘重な主題が繰り返される中で、歪んだ和声や経過音、分散和音などで装飾され、不思議な色合いが醸し出される。

第2曲 アレグレット・バラビーレ：軽快な2拍子の曲。ヨナ抜き音階を基調とする日本的な響きが、短いロンド形式にまとめられている。

第10曲 モデラート・テネレッツァ・アフエット：ハーブのような分散和音の優しい響きの中に芯のある旋律が全体を包む。

第6曲 アレグレット・ユモリスティコ：躍動の中にユーモアが込められている。中間部では狂喜乱舞の

後に落ち着きを取り戻し、絢爛に主題が表れて幕を閉じる。(W)

- 楽器編成：ピアノ独奏、演奏所要時間：約10分
- 使用楽譜：全音楽譜出版社刊

早坂文雄：写真《ポートレート》

この曲は、1940年に作曲された「子供のためのピアノ音楽第1輯」の第5曲として書かれた。早坂文雄は、この曲が作られた前年の1939年に、弟恭吾を亡くしている。この弟の写真を見て作曲された小品であると言われており、いわば弟に対する鎮魂の曲といえる。のちに、早坂文雄はこの曲の主題を「ピアノ協奏曲第1番」にも用いており、この主題に愛着があったことが伺える。(W)

- 楽器編成：ピアノ独奏、演奏所要時間：約3分
- 使用楽譜：自筆譜（近代音楽館所蔵）

A. N. チェレプニン：2台または3台のティンパニとピアノのためのソナチネ

アレクサンドル・ニコライエヴィチ・チェレプニンは1899年にサクトペテルブルクで生まれ、ロシア革命後にパリへ亡命、アメリカとフランスを中心に活躍して1977年にパリに没した作曲家である。彼は1930年代に東欧の民謡を採集して回り、その流れでアジアを訪れ、日本では早坂文雄や伊福部昭を指導して民族的作風を後押しした。彼が日本人作曲家を対象として設立したチェレプニン賞は、9人もの打楽器奏者を要する伊福部昭の出世作『日本狂詩曲』が1935年に1位を受賞した事でよく知られているが、チェレプニン自身もまた「打楽器のみで演奏される」第2楽章を含む『交響曲第1番』を1927年に書いている。本日演奏する『ティンパニとピアノのためのソナチネ』は1939年の作品だが、この間、西洋音楽史上初の打楽器アンサンブル曲と言われるヴァレーズの『イオニザシオン』（1931）を始めとして、ミヨー、プーランク、マルティヌーの協奏曲、そしてバルトークの『弦楽器と打楽器とチェレスタのための音楽』（1936）や『2台のピアノと打楽器のためのナタ』（1937）等の打楽器が主役となる作品が次々と書かれている。1930年代は西洋音楽史において打楽器が注目され始めた時代であり、チェレプニンは打楽器音楽の嚆矢を担う作曲家であったと言えるだろう。

曲はスケールの大きな第1楽章に始まり、律動的な第2楽章、宗教的な祈りの第3楽章を経て第4楽章の快活な行進曲で終わる、6分と言う短さを感じさせない内容豊かな小品であるが、この豊かさを支えている大きな要因の一つにティンパニとピアノの「主従」の扱いの巧みさがある。第1、2楽章で伴奏と副旋律のみに甘んじていたティンパニは、第3楽章では一転して冒頭から祈りの旋律をピアノの和音に導かれて歌う。第3楽章の中間部ではピアノが主となるが、後半で再びティンパニが主となって感情が高ぶって行き、遂にティンパニの旋律の aufakt で開始された第4楽章は次々と主従を交代して曲が進んで行くのである。練習曲風の交響曲第1番第2楽章とこのソナチネとを比べた時、その進歩には目を見張る物がある。西洋打楽器音楽創成期の産みの苦しみと熱気に思いを馳せて演奏したいと思う。尚、題名の通りティンパニは2台でも3台でも演奏出来るように書かれているが、本日は3台のティンパニで演奏する。(K)

- 楽器編成：ティンパニ+ピアノ、演奏所要時間：約6分
- 使用楽譜：BOOSEY & HAWKES 社刊

サティ：右と左に見えるもの ～ 眼鏡なしで

有名な「ジムノペディ」、「梨の形をした3つの小曲」だけでなく「乾からびた胎児」、「〈犬のための〉ぶよぶよした本当の前奏曲」など、エリック・サティの曲のタイトルは、奇妙なものばかりだ。今日演奏する「右と左に見えるもの ～ 眼鏡なしで」は、第1曲：偽善者のコラル、第2曲：手探りのフーガ、第3曲：筋肉質な幻想曲、からなる。曲中には「手の上に良心をのせて」とか「奥歯の端」、「中国の漆器」、「愛情と運命と共に」などの指示がある。これらの一見意味不明な言葉に、演奏する側は困惑し考えこんでしまう。そこで、このようなことを考えても仕方がない、と気付いて、譜面をよく見て自分なりの音楽を紡ぐことが出来れば、それがサティの意図するところではないのだろうか。

伊福部は学生時代に札幌で次兄勲や友人の三浦淳史や早坂文雄らと『新音楽聯盟』を結成し、「国際現代音楽祭」を開催。ストラヴィンスキー、ミヨー、エマヌエル・デ・ファリャ、シュルホフなど、時代の最先端をいく作品を演奏・紹介した。「右と左に見えるもの ～ 眼鏡なしで」も、この催しで伊福部のヴァイオリンと早坂のピアノで演奏されている。伊福部は仲人を務めた弟子の結婚を祝う会でもサティの「新婚者の起床」を弾いている。北の地で独学に励んだ若かりし伊福部にとってのラヴェルやサティは、「モダン・ヒーロー」だったのだろう。（N）

- 楽器編成：ヴァイオリン+ピアノ、演奏所要時間：約5分
- 使用楽譜：サラベール社刊

伊福部昭：ピアノ組曲

1933年に書かれたこの曲は、ドビュッシーの友人であるスペインのピアニストのジョージ・コーブランドのために書かれた曲であったが、作品を送付した直後からスペインでの内戦が勃発し、コーブランドによる初演がなされたか判然としない。その後、1936年にこの曲の第1曲がチェレブニンにより演奏され、全曲としては1938年のヴェニス国際現代音楽祭で演奏されているが、おそらくこれが初演であると考えられている。

この曲は、1991年のサントリー音楽財団による伊福部個展演奏会の際に、3管編成の管弦楽版に編曲され、その後1998年には弦楽合奏版にも編曲されている（管弦楽版及び弦楽合奏版は、「日本組曲」と改題されている）。

曲は4つの小曲から成る。それぞれが日本の夏の風物詩を描いたものとなっている。

1. 盆踊（ぼんおどり）

祭り太鼓のリズムに乗って篠笛が旋律を奏でる盆踊りの音楽をイメージした勇壮な小曲。

2. 七夕（たなばた）

「なべなべそこぬけ」の童謡を髣髴させる旋律が静かに夜空の向うから聞こえてくるような美しい曲。和声学上の禁則である平行五度を敢えて使用することで、旋律が耳に残る。

3. 演伶（ながし）

流し芸人による「寄ってらっしゃい見てらっしゃい」という客寄せの声の後、しみりとした嘆くような節が胸に染み入る。中間部のひとときの盛り上がりは殺陣を想起させる。

4. 佞武多（ねぶた）

青森のねぶた祭りをイメージした行進曲。和声の第2転回形によるオスティナートがポレロのリズムのよ

うに執拗に続く中で、笛をイメージした旋律が自由に展開され、徐々に盛り上がりを見せる。（W）

- 楽器編成：ピアノ独奏、演奏所要時間：約20分
- 使用楽譜：全音楽譜出版社刊

伊福部昭：ヴァイオリン・ソナタ

1985年に完成したこの曲は、1978年に作曲されて翌年に旧チェコスロヴァキアで初演されたヴァイオリン協奏曲第2番に引き続き、作曲を約束されたものである。もともと「ソナタという形式を壊す」ことを作風の特徴の一つとしてきた作者にとって、相当な産みの苦しみを伴ったものと思われる。「ソナタの形式を壊しながらも、ソナタを一生に一度は書いてみたいと思う」という氏の言葉からも、その苦しみは想像に難くない。そもそも、作曲というのは自らのインスピレーションを一定の楽器編成という枠組みにはめ込むものと考え、と、楽器編成というのが制約になってしまう。あくまでも、楽器編成は自らのインスピレーションを実現するための必要十分な条件であるべきである。その意味からも、作者のインスピレーションとこの楽器編成がぴったりと一致したこの曲が生まれたことは、日本の音楽家、音楽愛好家にとって、非常に幸運な事件であったと考えないわけにはいかない。

ヴァイオリニストの小林武史氏に献呈されている。曲は3楽章から成る。

第1楽章 アレグロ

変拍子の粗野な第一主題と、5拍子の叙情的な第二主題を中心に展開する変形されたソナタ形式。主題のヴァイオリンとピアノとの対話や中間部のカデンツァにおける朗々たる響きが心の琴線に響く。

第2楽章 《カンティレーナ》 アンダンテ

カンティレーナとは子守唄の意味。作者はこのピアノにおいて「ヴィブラフォンのような響き」を欲していたという。夜更けに焚火の傍らで、老女が寝てしまった子供を胸に抱きながら誂い語っている様子が思い描かれる。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

16分音符の休まない律動が印象的である。中間の叙情的な部分を挟み、曲は最高潮に達すると同時に終結を迎える。（W）

- 楽器編成：ヴァイオリン+ピアノ、演奏所要時間：約25分
- 使用楽譜：音楽之友社刊